

「パラスポーツ研究報告会を開こう」 年間を見通し、情報活用能力育成を目指した授業実践

横浜市立宮谷小学校 教諭 近藤 睦

キーワード：国語科、教科等横断、総合的な学習の時間、問題解決、情報活用能力

実践の概要

総合的な学習の時間に問題意識を醸成し、主体的・対話的で深い学びを具現化する小学校3年生国語科（話すこと・聞くこと）の単元作りを行なった。問題解決の過程の中で情報活用能力を育成することをねらいとし、ICT活用が効果的に働いた。

1. 目的・目標

(1) 単元目標

『パラスポーツ研究報告会』を開く」という目的に応じた話題を決めて、理由や事例などを挙げながら筋道を立てて話し方の工夫を考えて話し、話の中心に気をつけて聞き、質問したり感想を述べたりする。

(2) 情報活用能力育成のために

問題解決的な学習の中で、情報活用能力を育成することを年間における重点的なねらいとした。そのために、話すこと・聞くこと、書くことの単元や他教科を通して学校司書と連携し、図書・新聞・雑誌・パンフレット・WEB検索などの図書館資料を通して自ら情報を集め、記録し、整理し、表現につなげる学習を段階的に重ねた。

この単元においても、問題解決の過程の中で情報活用能力を育成することをねらいとし、学習者自身が既知と未知を整理して学習の見通しをもって学習を進めていく主体的な学び、情報と情報の関係を捉えて対話する学び、学習者自身がつけた力や学習の価値を自覚する深い学びの実現を図った。

2. 実践内容

2.1 問題意識の醸成

問題意識の醸成は、一年間の活動を踏まえて計画し、日常や総合的な学習の時間に行った。地域に住みながら、隣接する盲特別支援学校に通うOさんが、副学級交流として、月一回登校してきている。友達になったOさんのことを知りたいという思いから、アイマスク白杖体験、

盲導犬・パピウォーカー交流、盲特別支援学校訪問・車いす・福祉車両体験といった体験活動を重ねた。そして、体験活動を通して出会う社会に生きる人との交流を通し、実感や必要感のある学びを続けた。共通の体験活動を根拠にして、問題意識や願いを出し合い、対話していくなかで、子どもたちは「だれもが当たり前に混ざり合う社会の実現」という目標を見出し、学級全体の物にしていた（写真1）。

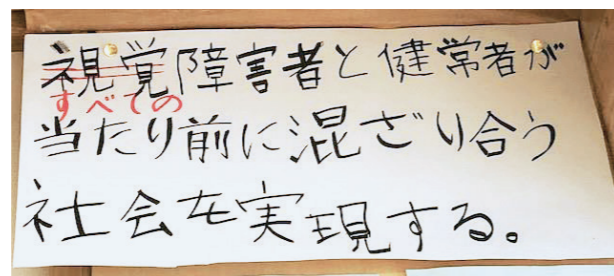


写真1 学級で見出した目標

2.2 課題設定と単元構成

学習問題成立までのこのような文脈から、単元の構成は、総合的な学習の時間と国語科を交互に挟んだ形で進めることとした。

この単元では、教科・領域等の学習を相互に作用させ、「国語科で学習した力で、表現する」という学習意識をさらに育てていきたいと考えた。学年末の学年行事に関連した単元として、保護者に相手意識をもつことで強い意欲を引き出し、協働的な学習の中で自分の考えを形成させることをねらった。

話し方の学習の既習として、前単元では互いに調べたことを報告し合う学習をした。3年時に書いた調査報告文と、報告会原稿の構成、表現の比較をし、文字言語と音声言語の特徴を考えた。それを通して他者への話し方や資料の提示の仕方、聞き方について深めてきていた。

そこで、まず教師が、この単元で行うプレゼンテーションのモデル動画を作成し（写真2）、それを読み取ることを通して既習の報告会との違いを考えさせた。動画の中の教師の話し方が、よりよい話し方のモデルとなり、自己評価、相互評価の視点、尺度となった。また、この動画をもとにして「時間制限は二分」「原稿なし」という制約を設け、内容や言葉の吟味、資料の数などを考えさせることができた。動画は、タブレット端末によって手元で必要に応じて繰り返し視聴できる良さがあった。

既習事項と、これからこの学習で身につけるべき事項の確認をすることで、単元の中で学習する必要感が明確になる。単元の中で国語はどの部分を担うのか、子どもと共に明らかにし共有するために、話すこと聞くことの指導事項について既習と未習について一覧表に整理させ、この単元で身につけるべきことを確認した。単元全体の見直しをもつことができ、学習計画を具体化できる。

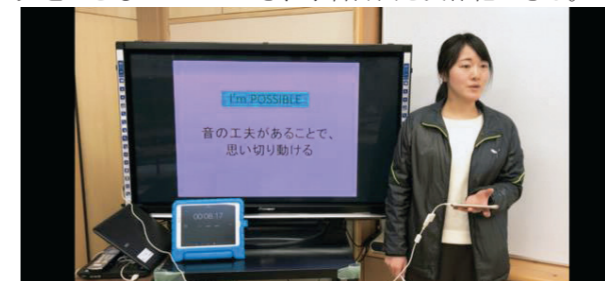


写真2 教師が作成したモデル動画

3. 学習場面における成果

3.1 情報の収集

情報の収集場面では、日本パラリンピック連盟が発行している公式教材をもとにして作成した資料集を共通教材とした。また、パラリンピックに携わる専門家を招いて、選手だけでなく、競技をサポートする人、道具や環境を開発する人、選手の競技力向上のために専門的な研究成果を生かす人など様々な立場の人が関わっていることに気付かせ、多角的な見方ができるよう仕組んだ。さらに、年間を通して学校司書と連携し、学校図書館、地域図書館から100冊以上の図書資料を集め、子どもが調べているテーマに合わせて「ヒト・モノ・コト」の色別に分けて表示し、閲覧しやすくした。各担任間だけでなく学校司書ともテーマを共有し、新聞記事、雑誌、パンフレット、WEB資料を印刷しテーマごとにまとめたファイルを集めた。それらをワゴンに乗せ、各教室を歩き来しやすくした。

また、これまで一年間の写真や動画、資料、活動記録は、学習材として教室サーバにフォルダ分けして保存していた。子どもは一人一人が持つ紙の学習ファイルと合わせて、サーバ上にも個人が集めた写真やデータをフォルダ整理していた。タブレット端末を活用してその情報を何度も見直し、共有し、活用することができた。

3.2 情報の整理・分析

教師の作例動画や、プレゼンテーション原稿における

事例の順番を読み取ることを通して情報と情報の関係について思考し、プレゼンテーションにおける適切な事例の順番を決めることができた。また、制作の過程で出来たスライドは候補として残して置き、後で比較して考えることができた。修正が容易なことから、配色や写真を検討する姿が見られた。

3.3 情報の発信・受信

原稿を読み上げたり、暗記したものを述べたりするのではなく、メモを基にその場の聞き手との対話のなかで考えながら応答すること、話し手の意図を考えながら聞いたり質問したりして応答することの二点は、この単元で目指した話し方、聞き方である（写真3）。



写真3 相手の反応を見て話す

プレゼンテーションのスライドは、タブレット端末のアプリ、PCのプレゼンテーションソフトなどから適切なものを選択した。また、初め・中・終わりの構成要素からスライドの枚数を限定することで、より効果的な事例の示し方や表現について思考する姿が見られた。

お互いに動画撮影をして、発表練習を見合った後も見直ししながら相互評価できる場を設けることができた。

4. 今後に向けて

タブレット端末のみならず、ワークシートや調べカードなども、年間を通して同じ形式のものを改善しながら使用し、子どもが必要に応じて選択して活用していた。グループ内発表での学習場面では、発表者の子どもはスライド提示、他の子どもは発表の様子を撮影、発表者に見えるようにストップウォッチ表示、発表者への指示表示、発表を見ての気付きの記載など、データ共有など様々な用途で自由に端末を使用している姿が見られていた（写真4）。



写真4 道具としてのICT活用

また、単元終了後、その後に見つけたニュースや、自主的に参加したパラスポーツイベントの様子を自分なりにまとめ、帰りの会の中で自主的にミニプレゼンテーションをするなど、自らの強い目的意識に沿って身につけた力を生かしている姿が見られるようになった。

このように、年間を通した問題解決的な学習によって、子どもは学びに必然性や価値、あるいは強い使命感を感じ、学びに向かう力が高まる。既習事項を生かして次の資質・能力を得ようとする中で、教科におけるねらいの達成とともに情報活用能力の育成が図られると考える。

【実践時期】平成29年12月～平成30年1月 【児童】横浜市立港北小学校 4年生全3学級(108名)

【単元指導計画】(国語における全体時間7時間)

◇総合的な学習の時間に学習課題を設定し、目的意識・相手意識を確認し、全体の学習計画を立てておく。伝える内容を大まかに絞り、はじめ・終わりの内容を立てておく。ゲストティーチャーを招く取材計画も含む。

(1) 国語科としてゲストティーチャーへのインタビューの必要感から聞き取りメモの取り方に課題意識をもち、「聞き取りメモの工夫」について考える。(1時間)

◇総合的な学習の時間に、ゲストティーチャーを招き、取材する。

(2) 既習事項を確認し、この学習における効果的なプレゼンテーションについて考える。(1時間)

(3) はじめ・中・終わりの構成のうち、中で話すために適切な事例を決める。(1時間)

(4) 中で話す事例の順番を決める。(1時間)

(5) スライドの内容を決める(1時間)

◇総合的な学習の時間にスライドを作成する。

(6) グループ内発表会を開き、発表を改善する。(1時間)

◇総合的な学習の時間に、保護者を相手に報告会を開く。

(7) 報告会の動画をもとにふりかえり、この単元で付けた力を確認する。(1時間)